

目 次

- ・ 2001年の収穫 日本公共図書館史関係書の紹介 (石井 敦)
- ・ 日本図書館文化史研究会20周年記念研究集会・総会の開催と発表募集のお知らせ
- ・ 2001年度第3回関東地区研究例会のお知らせ
- ・ 会員の業績 / 会員動向 / 会費納入のお願い / 事務局移転について

[研究例会の報告に代えて]

2001年の収穫——日本公共図書館史関係書の紹介

石井 敦

昨年12月15日研究例会で「図書館史研究会発足前後のいきさつ」について報告をしました。このニューズレターでは当然その報告要旨を掲載すべきなのですが、このテーマに関しては、機関誌『図書館文化史研究』(本会20周年記念号)で改めて執筆・発表する予定なので、そちらへ譲り、ここでは標記のタイトルでその責を果たさせていただきます。

なお、図書館史研究の年間文献展望は、本会が当然行うべき重要な仕事だと思っています。図書館史研究の専門的団体である本会は、少なくとも年間の研究動向について総括することは必要不可欠の仕事だろうと思うのです。

さて昨年は日本公共図書館史にとって、比較的重みのある研究書が多産された年であった。

その第一は3月に刊行された七宮氏子氏の『岩手・近代図書館運動史』(七宮文庫刊 B5 140p)である。七宮氏の勤務されていた富士大学の「紀要」に1996年より99年まで5回にわたり発表されたものを中心にとまとめられたもので、タイトルに示された”運動史”にその特徴がうかがわれる。岩手県には『岩手県立図書館30年の歩み』(1953年 A5 114p)というきわめてユニークな館史がある。全編ほとんど当時の新聞記事を引用し、コメントを付けたもので、図書館法公布後すぐに出されただけに、親しみのあるくだけた館史であった。ただ、同書は県立図書館創設の1922(大正11)からが中心で、それ以前の動向は僅か数ページにすぎなかった。

しかし、本書では、自由民権期の求我社・玉東舎などを全面的に調査、以後も盛岡教育会など民間の図書館設立運動に力点をおいてまとめられた所に特色がある。

小川トキ子『岐阜県公共図書館の歩み——江戸時代から現在まで』（著者刊・岩波出版サービスセンター A5 283p）

1982年—94年まで、10回にわたり「中部図書館学会誌」に連載してきたものに、新しく江戸時代からの雲橋社文庫、荏野文庫なども加えられ、他方では1995年岐阜県立図書館新築開館式まで追いかけて1本にまとめられている。小川氏は1950年代から県立図書館に勤務し、県内市町村図書館の動向にも早くから関心をもち、その仕事を通じて関係資料の目配りを怠らなかつたから、県全体の公共図書館の発展状況を、単に公式的な資料だけでなく、県内研究集会の討議資料など生々しい資料も的確に引用して読みやすくまとめている。

とくに自身で別に『岐阜県立図書館史』（1996年）をまとめられているので、公式的な資料は上記『館史』に譲り、かなり気楽に書けたのではないかと思われる。ぼくが大変興味をもったのは、大垣市立図書館長に1929年、寺沢智了が就任したことである。日比谷、東大、京城大などの図書館に勤務していた彼が、突然大垣の館長に、そして目覚ましい活動、阪谷俊作、貞松修蔵らと東海四県市立図書館長協議会を結成したりしていた。このあと彼は神戸市立図書館に移るが、当時の職員の聞き書きや、面白いエピソードも紹介されている。

『岡田健蔵へのオマージュ』（「北の文庫」No. 30～31 2001年6月 8月）

坂本竜三氏による大著『岡田健蔵伝』については、すでに小川徹氏による本誌NO. 71（2000年7月）やその他でも紹介されているが、この著名な図書館人に関しては、坂本氏と共に北海道図書館史の研究をつづけられている藤島隆氏も”坂本氏の成果に思い立って”同氏が収集・蓄積してきた諸資料、諸研究を「北の文庫」2冊に一挙に発表された。すなわち関係者の岡田論、関係する「新聞記事」、「岡田健蔵著作目録」、「戦前期（私）市立函館図書館刊行資料一覧」などである。これらの資料は、岡田個人の間人像をより立体的に把握するのに役立つだけでなく、当時の日本の公共図書館の動向を知るうえでも貴重な資料といえるだろう。坂本氏の著作と併用されるなら、より一層効果が大きいと思う。

根本彰編『戦後アメリカの国際的情報文化政策の形成』（東京大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室刊 2001年3月 A4 187p）

簡単に書けば根本氏を中心とする科研費補助でまとめられた「占領期図書館史」の第2集である。3部に別れ、第I部は根本彰「ALAプリンストン会議（1946）の関係経緯と勧告事項」、他2篇、第II部ALA文書館占領期日本関係文書の解題・目録、第III部はこれまでの研究の参加者の研究業績一覧となっている。

一方、個別の館史では『福井県立図書館の50年』（A4 63p）。福井県はこれまで県協会報で、葛西誠氏が略記したものと、JLA百周年記念『近代日本図書館の歩み・地方篇』（1992年）での福井県の項（加藤良夫執筆）しかなかっただけに、本書の刊行は大いに期待されたのだが、明治期から昭和敗戦時までは僅か3ページの記述で終わっている。戦後においても、たとえ戦災、大地震を蒙ったとしても、長い

間、福井県が低迷をつづけてきたのは何故なのか、前記、加藤良夫氏の指摘があるにも拘わらず、そこからほとんど学んでいないのは残念である。特色としては、前館員の回想記がある程度。「50年の歴史」としてはやや寂しい。

『鳥取県立図書館10周年記念誌』(B5 114p)。この書名をみた当初、戦前からすぐれた歴史をもつ鳥取が何で「10年」？60年の誤植かと思ったが、読み進むうちに了解した。1990年、新館建設と県立2館制から1館制の条例改正で、一本化し、鳥取県立はわが館のみとの意気込みを示したわけらしい。

しかしこの意気込みの中に、危険なものが感じられる。それは戦前戦後を通じて、鳥取の風土の中で、県民に愛され、すばらしいサービスを行ってきた歴史を切り捨てていいのか、この歴史の中から多くのものを学ぶべきではないのか、ということである。取柄は県内市町立図書館員との座談会「鳥取県立図書館の10年と今後への期待」、あとは図書館要覧の拡大版というところ。

なお、「鳥取県立20年史」、「同30年史」、「同50年史」ももっているので、今回はこれらをまとめて「70年史」として刊行してほしいものである。

この記念誌と対照的なのが、同じ県内の『図書館のあゆみ・米子市立図書館10周年記念誌』(A4 75p)である。

こちら県立から独立して米子市立になって10年。「10年史」だが、前史として米子の図書館づくりの動きを明治期から説き起し、鳥取県内全体の図書館設置状況を鳥瞰、さらに同市内で起こった民衆的図書館運動「同栄文庫」なども詳細に紹介している。

『札幌の図書館50年』(札幌中央図書館 A4 91p)すでに『札幌の図書館30年』(1981年)で明治期からの前史を詳述しているので、ここではその後の大きな飛躍の20年をまとめている。だが大規模になってその分だけ官庁出版物、お役所的な編集になったようだ。札幌市立がここまできたのには「札幌の図書館づくりをすすめる会」など住民の大変な努力があり、「30年史」では「市民のなかの図書館」の章を起こして多くの住民の声も掲載しているが、50年史では市民の反映はほとんどみられない。変わった内容として「利用者アンケート調査」を集計して掲載しているが、こういうものは「館報」に掲載すればすむことではないか。「資料編」はなかなか充実している。但し、歴代図書館長名はいただけない。これを掲載するならば、永年苦勞してここまで築き上げた職員名をまず記載してほしかった。

伊万里市民図書館編『序章・私たちの図書館——「もつ」ためでなく「ある」ために——』(B6 34p)。図書館設置条例第1条を「伊万里市は、すべての市民の知的自由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治の発展を促すため、自由で公平な資料と情報を提供する生涯学習の拠点として、伊万里市民図書館を設置する」。長い間の辛抱強い市民運動が結実し、上記のような図書館設置条例をまとめ上げた時の館長が、新館づくりのスタートから次の館長へのバトンタッチするまで、その間にどのように行政と協働し、図書館を運営してきたか、独自の図書館経営の哲学とそれを鍛えた図書館の歴史に対する深い認識が基礎にあった点がみてとれる。チョッと外部から来た人でも、こういう識見のある名館長がいること、それなればこそこのような図書館が生まれたのだと、このことを知る上でもすばらしい「図書館史」

である。

なお、昨年は鈴木英二さんが亡くなられた。鈴木さんは、本会会員ではないが、日本図書館協会百年史の編集委員をつとめられ、学校図書館と短期大学図書館の部を担当され、ご自身も一部を執筆、さらに『財団法人・興風会図書館の五十年』（興風会刊 1991年 B6 236p）をまとめられている。戦前から戦後にかけて50年、私立図書館としてはほとんど一般の公立図書館と変わらない活動をしてきた珍しい図書館の歴史である。しかも戦前は仙田正雄、戦後は佐藤眞という有名な人が館長を務めていたユニークな図書館なのである。

(2002. 2. 2)

日本図書館文化史研究会20周年記念研究集会・総会の開催と 発表募集のお知らせ

日本図書館文化史研究会20周年記念研究集会・総会を、下記のように開催することになりました。つきましては、研究発表申し込みの受け付けを行いますので、ふるってご応募ください。また今回に限り、宿泊の斡旋を行いますので、ご希望の方はご利用ください。

なお、記念研究集会・総会の詳細なプログラムはニューズレター次号に掲載する予定です。

記

日 時 2002年9月15・16日（日・月）
場 所 アルカディア市ヶ谷（私学会館）・法政大学
参加費 会 員1,000円・非会員1,500円（予定）

○ 記念シンポジウム

1. 日 時 9月15日（日） 12:30～ 受付
13:00～16:30 シンポジウム
2. 場 所 アルカディア市ヶ谷
3. 内 容 「図書館文化史研究の回顧と展望（仮題）」
4. 報告者 石井 敦、岩猿 敏生、藤野 幸雄（五十音順）

○ 記念パーティ（懇親会）

1. 日 時 9月15日（日） 16:00～ 受付
16:30～19:00 パーティ
2. 場 所 アルカディア市ヶ谷
3. 形 式 立食（フリードリンク）
4. 参加費 5,000円～6,000円程度（予定）

○ 個人発表・総会

1. 日 時 9月16日(月) 9:45～ 受付
10:00～14:00 個人発表
2. 場 所 法政大学(予定)
3. 発表者 4件程度

★発表者の募集について

1. 発表時間 質疑・応答を含め、1件45分を予定
2. 申込方法 次の事項を明記の上、郵便、ファックス、もしくは電子メールで下記事務局まで申し込んでください。
- * 氏名(ふりがな)
 - * 連絡先(〒・住所・電話(ファックス)・電子メールアドレス)
 - * 所属
 - * 発表題目
 - * 発表要旨(200字程度)
 - * その他(発表機材の希望等)
3. 申込締切 2002年3月31日(必着)

宿泊の斡旋について

今回に限り宿泊の斡旋を行います。宿泊先はシンポ等の会場と同じアルカディア市ヶ谷(私学会館)です。ご希望の方は、氏名(ふりがな)・連絡先を明記の上、郵便、ファックス、もしくは電子メールで、下記事務局まで申し込んでください。料金は、シングル一人6,306円(税・サ込み)＋朝食1,050円です。申し込みの期限は特にありませんが、満室になり次第締切となります。

20周年記念事業実行委員会事務局

小黒 浩司

◎関東地区研究例会(2001年度第3回)お知らせ

- 日 時 3月9日(土) 13:30～
- 場 所 法政大学大学院棟702番教室
- 発 表 松尾 昇治:東京都中期計画と図書館振興策について
大沼 宜規:帝国図書館と小杉文庫のことども

問い合わせ先 小川徹

原稿募集

- ◇ 「ニューズレター」の原稿を募集しています。
研究に関する情報、書評なんでも結構です。(できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を)事務局(石井)あてお送りください。

会員の業績(研究成果紹介)

☆森川彰「海軍兵学寮文庫の創設」『同志社大学図書館学年報』27号別冊 2001.6

☆赤星隆子『フランス近代図書館の成立』理想社 2002.1

今後、図書館文化史研究に関するものを中心に会員の業績を紹介してゆきたいと思います。ご自身の発表された業績、あるいは会員の業績についてお気づきになったものを事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

会員動向

新入会員

住所変更

会費納入のお願い

2001年度会費が未納となっている方には、今回振替用紙を同封させていただきました。年会費は3,000円です。事務局移転にともなう引継や決算の作業軽減のため、早期納入にご協力ください。

事務局移転について

2002年4月より事務局が東京に移転します。住所等詳細が未定ですが、5月発行のニューズレターによってお知らせする予定です。それまでは、暫定的に現在の京都の事務局にご連絡いただければ結構です。

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三